

現代社会における若者ファッションの位相： Instagram インフルエンサーに見る 自分らしさの現象学的考察

橋 本 奈楠子*

本研究は「ファッションを身に纏うことにより人はどのように社会と距離を調節しているのか」ということの解明を目的とする。この目的を達成するために、現象学を参考にしつつ、理論研究とインタビュー調査分析を合わせた多角的な考察を試みた。

物事が凄まじいスピードで変化していき、日々大量の情報に溢れ、不安定な近年の現代社会では、「自分らしさ」や「多様な生き方」という言葉をよく耳にする。その結果、自由に身に纏うことのできるファッションにもフォーカスが当てられるようになった。様々なアイテムやスタイルを、自由に身に纏うことのできるファッションは私たちに「自分らしさ」というものを与えてくれるもののひとつだと考えられえているからだ。特に、若者の間ではファッションの重要度が上がっていると私は感じている。一方、外見を華やかに着飾るファッションは単なる娯楽として認識される傾向も強い。私はファッションこそが、人間が複雑な社会を生きる上での工夫や適応過程を示唆してくれるものだと考えて本論文を執筆する。

そもそも、人はファッションとどのような関係にあるのだろうか。この問いを深く掘り下げ、考察するために、現象学におけるモーリス・メルロ＝ポンティの「身体論」を中心に扱い、研究を進めていった。メルロ＝ポンティの「身体論」では、人間は身体を媒体として数々の物事を経験し、社会に存在

* 都市社会文化研究科博士前期課程 2020 年 3 月修了

していることを知覚していると考えられている。私たちが日々「ファッションを身に纏う」という行為も身体を媒体として経験されることに繋がるのではないかと考えた。

第1章では、身体とファッションの関係について理論的にまとめた。メルロ＝ポンティは身体論を展開するために、デカルトによる心身二元論を批判した。西欧思想においてデカルトの心身二元論はあたりまえの理論として考えられ、人間の身体と心はそれぞれ別の物であるとされてきた。身体と心が互いに与える影響はないとされてきたのだ。しかしメルロ＝ポンティは、私たちの身体こそが社会に内蔵するものであり、身体を媒体として経験することによって私たちの心に影響を与えているのだと主張した。

次に、身体とファッションの関係について触れるために、メルロ＝ポンティの身体論に影響を受けたルウェリン・ネグリンと鷺田清一のファッション論についてまとめた。

ネグリン (2016=2018) は、ファッションとそのファッションを着用した身体が相互作用的关系にあるという見解を述べた。既存のファッション論では、着用した時の「ルック」が着目される傾向にあったが、それよりも、ファッションを身に纏った身体がどのように社会で振る舞うのかが重要だと主張した。

鷺田 (2005) は、メルロ＝ポンティの身体論を用いて、私たちの身体とファッションが密接な関係にあることを「第二の皮膚」という概念を使って説明した。私たちは自分の目で自分の体全身を確認することはできない。目で見ることのできる範囲は限られており、それ以外の部分は鏡を通して見るか、身体の一部をどこかにぶつけて、その部分の存在を確認するか、または想像するしかない。人間の存在は脆いものであり、その脆い存在をはっきりと確認するために私たちは衣服を身に纏うと考えた。また、人はファッションを身に纏うことにより、他者から視線を集める。そして他者という回路を通して

自らの存在をより明確にしていくと説いた。

鷺田はファッションを身に纏うことにより、身体そのものに社会性が生まれると考えた。他者から自分がどのように見られているかということ意識することにより、衣服がファッションへと変化し、そのファッションからメッセージが発せられる。ファッションは人間にとっての第二の皮膚になり、コミュニケーションの手段となると鷺田は考える。

以上の理論的検証を経て、私は、ファッションによって身体が社会へとリードされていくことを確認した。

第2章では、衣服とファッションの体系について社会学的に考察した。

ファッションと人間の関係を考えるにあたり、まずファッションや衣服についての歴史についてまとめた。ファッションや衣服の歴史において、転換期とされるのは14世紀である。14世紀になるとファッションによる男女の性差がはっきりとし、社会において文化コードが現れる。文化コードが現れたことにより「モード」が誕生した。18世紀になると、それまで貴族階級の人々しか着られなかったものが、イギリス産業革命の影響により貴族階級以外の人々が着られるようになり、ファッションの民主化がはじまった。時代が進むにつれて、ファッションの在り方は様々な場面において変化していった。

現代において、ファッションは「自分らしさ」を目指すためのツールとして存在する社会学者の土屋淳二(2009)は、ファッションは自己の在り方と強い関係を持ち、人に与える影響が大きいものだと考える。自己の在り方をファッションを通して考えたり、ファッションによって他者に向かってメッセージを表明したりすることにより、人は社会に生きる存在として自分自身を確認することが出来ると考えたのだ。

第3章では、第1章と第2章でまとめた理論を実践的に検証するために、2人のインスタグラマーにインタビューすることにした。ファッションを身に纏うことで自分を不特定多数の他者に表現しているインスタグラマーたちは、

実際にファッションとどのような関係をもっているのかを明らかにしたかったからだ。

対象者2人のインタビューを分析するうえで、私から見た2人のインタビューについても分析をした。その際には、私自身のオートエスノグラフィーを足がかりに、インタビュー状況そのものを現象学的に考察することにした。インタビュアーとインタビューイの関係性に着目し、インタビューの過程で現れたファッションに関する考えや感覚の相違点や共通点を明らかにした。ファッションについての話を主軸として3人の見解を並べると、3人の感覚の違いから、それぞれの社会に対する距離が違ったことが明らかになった。言葉を通して物事を理解するSの場合は、これまで様々な経験を自分の言葉で整理していた様子が伺えた。社会に対して距離が近く、S自身にとっての調節の仕方を理解しているようだった。一方Eは、社会に対して目を向けてはいるが、E自身の世界に集中しているように見えた。社会との距離をたもちつつ、Eは自身の身体を使った表現を通して自分の世界を広げていく姿勢が見られた。そして、私は自身のオートエスノグラフィーを通して、言葉と感覚の両者を持ちながら物事を整理していくことが明らかになった。それまでの経験を通して自分の中の葛藤が見えた。社会との距離においても、Sのように社会と距離を縮めたいという思いはありつつも、Eの様な独自の感覚に集中したいという立ち位置におり、SとEの中間地点にいるような印象を受けた。また、3人ともそれぞれ違う経験をしてきたが、ファッションがそれぞれの人生において特に重要な存在であるかという見解が最終的に強力な共通項として見出された。

第4章では第3章でのインタビュー分析を踏まえて考察を行った。3人が最終的に同じような見解に至った理由には、3人がファッションを通して社会との距離を調節してきたということであった。ファッションを身に纏うことにより自分の存在を知覚し、他者や社会とのつながりを意識したことが共通の実践

的経験としてあり、ファッションを身に纏う身体と社会が相互作用するような形で現れていることも検証できた。

理論研究とインタビュー調査、分析を踏まえ、現代社会において私たち人間が生きるうえで無意識に自分たちの立ち位置を流動的に調節していることを確認し、具体的な実践方法についても考察を深めることができた。私たち3人にとって、ファッションは、身体を通して私たちの存在を明らかにするだけでなく、日々変わりやすい心や感情にも寄り添ってくれる存在であった。私たちが感じるすべての感情に寄り添ってくれるものであり、すべての感情を体現してくれるものがファッションとしてあり、ファッションを身に纏うということは、単なる娯楽的なものではなく、私たち人間が社会で生きるための皮膚を与えてくれることとして、現実の世界で存在することを確認できた。

本研究の不十分な点について最後に述べたい。インタビュー調査では現象学的分析を試みたが、インタビューの手法や分析については、今後より一層の工夫が必要だと考える。今回の研究では2人のインスタグラマーを対象にしたが、より深い分析や考察をするために、多くの対象者にインタビューを行い、幅広いデータを用いることが必要だと考える。人の心はグラデーションのようなものであり、その心にファッションは寄り添うということを示すには多くの人から調査をし、その心のグラデーションを具体的に表すことで、研究としてより説得力のあるものとなるはずだ。

また、オートエスノグラフィーの部分においてもより多くの情報が必要だと考えた。オートエスノグラフィーを事細かに記すことにより、インタビュー調査のデータと照らし合わせる項目が増え、深い考察ができただろう。

しかし、データが少ない中でも私を含めインタビュー対象者3人のファッションについての見解を通して、3人の関係性などについて、次のステップにつながるような考察ができたと確信している。